

『粟津の露』前半抜粋

二世橋旭翁 作詞作曲

驕る平家の大軍を 俱利伽羅峠に追落し 旭將軍と世に謡はれ 威勢輝く義仲も

みだりがはしき振舞に 武運もやがて槻弓や 都に入りし東国の 討手の勢に打破られ

残るは主従僅かに五騎 近江路さしてぞ落行きける

かゝる所に唯一騎 汗馬に鞭あて驀進 馳せついたりしは巴とて 今井四郎兼平の妹にて

木曾將軍の寵を受け 朝夕側に侍りて 心を尽すのみならず 戦の場にも従ひて

屢々偉勲を奏しける 才色兼備の女丈夫なり 静かに御前に進み出で

「君の御先途覚束なく 御後慕ひて参り候ひぬ 無事におはする御姿を 拝する事の嬉しさよ」と

あとはいはねの岩つゝじ いはぬ思ひの色みえて 袖にあまりし涙かな

此の時義仲容を改め 「如何に巴 最後に臨み義仲が 女性を連れしと聞えなば

末代までの恥辱なり 名残は更につきねども 今より暇遣はさん いづちへなりと落ゆき候へ」

巴は涙に咽びつゝ、「そもや妾は故郷を出し始より 実には浅からぬ主従の 契りの末は白雲の

天が下には何処迄も 命の限り添ひまつり 御供せんと誓ひしを 落ちよと仰せ候ふは

あな情けなの御説かな さりながら 今は是非なき御場合 されば君 御最後の手向草

好き敵あらば引組んで 首打取って御覧に入れん」と 敵や来ると待つ折しも

武蔵国の住人 御田八郎師重 三十餘騎にて駆来るにぞ

巴は馬上に諸手を拈げ 鎧一当て馳せ向ふ

雷をのぞむ顔に 長き黒髪ふりさばき 敵を睨みし勢は 水際立つてぞ見えにける

馬は名に負う鬼栗毛 端武者は蹄にかけ散らし 御田八郎にひたと迫り

彼が打つ太刀空うたせ 兜の鍔をむんずと掴み 鞍の前輪に引つけ押つけ

首搔き切つて捨てたりけり

かくて巴は鎧脱ぎ捨て 遙か御前に目礼し 悲しき別れに近江路や 信楽笠を木曾の里

忍び忍びに落行きけり

日も入相の鳩の海 無常を告ぐる三井の鐘 浪の粟津の松風に 残る韻ぞ哀れなる